

## 2021 年度 OICE 交換留学報告書

### 留学先・期間

21 年 10 月 ~ 22 年 3 月 ドイツ・ミュンヘン工科大学建築学専攻 (OICE 交換留学)  
22 年 4 月 ~ 22 年 8 月 ドイツ・ハノーファーにて設計事務所インターンシップ

### これだけは

- ◆ ドイツに 1 年留学するなら、留学中のインターン (企業・研究問わず) はビザ的に実現可能。学習だけでなく就労経験ができるので、経験の幅が広がりかなりおすすめ。
- ◆ 英語を鍛えたい、ドイツ語を鍛えたい、ドイツではどちらの環境も選ぶことができる。
- ◆ ドイツで大学に寮を紹介してもらえない場合、部屋探しには気合いを入れる必要がある。

### 報告書本文

#### 1. 留学の目的

1 つ目に、日本では学ぶことができない欧州のランドスケープデザインを学び、その先の海外大学院正規留学の足がかりとすること。2 つ目に、修士研究のテーマである水辺空間のデザインについて、ヨーロッパの好事例の現地調査を行うこと。3 つ目に、インターンシップを通じてランドスケープ設計の実務を経験すること。(奨学金申請時の資料から引用)

#### 2. 留学のプランニング



##### (ア) トビタテ奨学金の獲得

2020 年 A セメスターから留学をする予定だったため、1 年前の 2019 年 9 月にトビタテ奨学金に応募した。2020 年 2 月に 12 期としての採用が決定した。ちょうど Covid-19 が全世界で拡大し始めた時期であり、3 月末には 12 期の留学開始期限を 2021 年 3 月末に延長することが通知された。留学開始期限はその後、2020 年 7 月の通知で 2022 年 3 月末に延長された。そのためトビタテ奨学金を利用するという計画は崩さずに、留学時期の延期を検討することができた。

トビタテ奨学金は14期までで終了したが、正規留学に限らず幅広い留学計画を支援してくださる懐の深いプログラムなので、後続の奨学金プログラムのアナウンスは注目しておくといえる。注意点としては、トビタテ奨学金を受給するにはインターンシップや研究活動などの実践活動を行う必要があった。私の場合、トビタテ奨学金合格時にはインターンシップの受入先は未定だったが、2021年S semesterに東大で受講した設計製図演習の講師の方の繋がりで、インターンシップ先を留学前に決定することができた。

その他には、経団連の奨学金や、業務スーパーの奨学金などを見ていた。後で知ったが、EUに留学する場合は、Erasmus+の奨学金も日本から応募できる。

#### (イ) OICE 交換留学・ミュンヘン工科大学を選んだ理由

「①ヨーロッパ」の「②建築学科と協定を結んでいる大学」かつ「③B.Sc. of Civil Engineeringであっても建築学科に受け入れてくれる」という条件で、全学交換留学・工学系交換留学の協定校から選んだ。条件の詳細は後ろに記載した。最終的にミュンヘン工科大学に留学先を決め、2020年3月にOICE交換留学に応募した。

##### ① ヨーロッパ

学部3年の夏にドイツ・バウハウスワイマール大学のサマースクールでドイツに2週間滞在した経験から、オランダ・スイス・ドイツの風景に強い興味を持っており、留学先はヨーロッパ、特にこの3ヶ国を希望していた。

##### ② 建築学科と協定を結んでいる大学

建築設計・都市計画について海外大学院の授業がどのようなものか体験するのを目的の1つとしていたため、前述の3ヶ国にある協定校で建築学科が有名な工科大学として、デルフト工科大学、ETHチューリッヒ、ミュンヘン工科大学・アーヘン工科大学をピックアップした。このうちデルフト工科大学は建築学科との協定がなかった。

##### ③ B.Sc. of Civil Engineeringであっても建築学科に受け入れてくれる

ETHチューリッヒの建築学科事務に問い合わせをしたところ、建築学科を学部で卒業していないと留学は受け入れていないとのことだった。私の東大での所属は学部・修士共に土木学科のため、条件が合わなかった。一方で、ミュンヘン工科大学の建築学科事務では受け入れてくれると返答が来た。その時点で、スイスにも近いミュンヘンに興味を湧き、留学先の第一希望に決めた。アーヘン工大には問い合わせをしていない。

#### (ウ) コロナ禍による延期

前述の通りコロナ禍により留学を1年延期し、合わせて卒業も1年延期した。東大での所属専攻の修了年限は3年のため問題はなかったが、学費を節約するため、インターンシップ中は東大を休学とした（交換留学中は休学できない）。

#### (エ) 留学と就職活動の兼ね合い

2020年4月頃に留学の延期に伴う卒業の延期を決めたため、就職活動の本番は2021年と意識していた。修士1年の2020年夏は土木系2社のサマーインターンに行き、情報収集に努めた。修士2年(1回目)の2021年8月・9月には省庁を含む様々な分野の7社のインターンに参加して、就職活動における軸を固めた。インターン選考により渡航前に内々定を頂いていたことで、2021年10月から2022年3月の交換留学中はほとんど日本の就職活動はせず、学業に専念することができた。

一方で2022年4月から8月にかけての設計事務所でのインターンシップ期間において、ヨーロッパでの働き方に触れ、またヨーロッパで働く日本人の方のお話を聞く機会が多かったことで、就職先を考え直す機会があった。具体的には、より興味に近いことを仕事にできる日本企業の新卒採用に新たに応募した。最終的に、2022年9月の帰国直後にそちらの企業から内定を頂き、以前に持っていた内々定を辞退して、就職活動を終えた。

### 3. 渡航準備

#### (ア) 住居

##### 【ミュンヘン】

ドイツはほとんどの都市で賃貸マーケットは売り手市場になっており、特にミュンヘンは2~4人でキッチンと水回りをシェアする形のシェアアパートメントで月600ユーロ、1人部屋だと800ユーロほどするのが普通。ミュンヘンのStudentenwerkという学生支援組織は交換留学生に優先的に寮を配分してくれるため、月335ユーロでOlydorfという人気の寮の1人部屋に住むことができ、破格の値段だったと思う。

##### 【ハノーファー】

大学に所属していなかったため、自ら寮を探す必要があった。ドイツで数か月だけ部屋を借りる場合は、subletという形で部屋を借りている人から又貸しを受けるのが一般的である。まずWG Gesuchtというサイトでsubletしてくれる人を探した(賃料レンジは1人部屋で月400~500ユーロ)が、4月からの入居で2月末から探し始めたのでは遅く、またハノーファーに直接行って面接してもらうこともスケジュールの都合上難しかったため、この方法では部屋が見つからなかった。最終的に、民間企業が運営する学生寮にて、1人部屋を月600ユーロ程で借りることができた。ハノーファーであればシェアアパートメントを月300~400ユーロで借りることができるため、少し高めではあるが、1人部屋であることを考えれば許容範囲だと考えて借りることを決めた。

#### (イ) 保険

ドイツで学生としての滞在許可を得るためには公的保険に加入している必要があり、月100ユーロ程を支払ってDAK Gesundheitに加入していた。一方で、東大の規定で交換留学の学生は付帯海学に加入している必要があるため、こちらも渡航前に加入した。留学の計画を途中で変更した際には、付帯海学の期間も変更する必要があった。

#### (ウ) 銀行・支払い手段

保険に加入するためにドイツの銀行を開設する必要があり、現地についてすぐに、N26 というオンライン銀行で口座を開設した。維持費がかからず、開設も素早いため、周りでも短期留学者は N26 を使っていることが多かった。N26 のデビットカードによる現金の引き出しは ATM および各地の dm (ドラッグストア) 店舗で可能であり、ヨーロッパの他国においても引き出しに問題はなかった。奨学金が振り込まれる日本の口座から N26 への口座の送金は、日本の銀行のオンラインバンキングおよび Wise という海外送金サービスを組み合わせて短時間で送金できるようにしていた。

#### (エ) 通信

O2 というキャリアのプリペイド SIM を利用した。利用した分だけトップアップしてプランを追加する形式だったので、利用する月としない月の差が激しい私には合っていたように思うが、割高感があった。他にも様々な格安キャリアがあったので比較してみたい。

### 4. ミュンヘン工科大学 (以下、TUM) での経験

#### (ア) 履修計画

建築学科のバディプログラムに応募し、TUM の建築学専攻の修士学生を 1 人紹介してもらった。渡航前のオンライン相談を 1 時間ほどと、渡航後に建築学科のツアーをして頂いた。お礼に柔道の東京オリンピックグッズを持っていったら (柔道をやっていた方だったので) 喜んでもらった。オンライン相談にて、正規の学生は 30ECTS を 1 セメスターに取得することと、遊ぶのは月 1 回くらいであることを教えてもらい、とりあえずの目安とした。

結果、スタジオ (15ECTS) を 1 つと、セミナー (6ECTS) を 3 つ、レクチャー (3ECTS) を 1 つ履修した。毎土曜日には文化交流プログラムに参加していたためかなり忙しかった。TUM では英語のディスカッション能力を鍛えたいと考えていたため、英語でのディスカッションができるグループワーク形式の授業・プログラムを選んでいく。

#### (イ) 講義・演習の内容

##### スタジオ (Chair of Climate Responsive Design)

正規学生が 5 人、交換留学生在が私を含めて 2 人のスタジオだった。1 ヶ月程は 5 つのテーマ (Climate, History, Utopia, Mobility, Public Space) のリサーチを行った。後半は 3 つのグループがある程度自由な発想で、"Streetless" 「車から歩行者への転換」をテーマに将来のミュンヘン像を描いた。「ある程度」自由というのは、ミュンヘンのどこを敷地として選んでも、どのようなロジックで選んでもよいが、現実の延長線上でしかないアイデアや、逆にあまりに非現実的なアイデアは、毎週のチューターによるエスキスで軌道修正された。

最終発表では教授から成果を褒めていただくことができ、スタジオの成果を TUM シティ

キャンパス前で開かれた展示会に出品した。この展示会は、ミュンヘンの中心部を走る道路を1区画分（TUM 前の区画分）通行止めにして行われたもので、建築スタジオの発表に限らず、沢山の椅子が置かれたり、ワークショップがあったり、様々な活動が車を閉め出した Street の上で展開するという、まさにスタジオのテーマにぴったりの展示会だった。

TUM での生活の半分はスタジオに占められた。スタジオで後半のグループを組んだ2人は留学生活で最も仲良くなった人たちに入る。また、スタジオを作り上げる中で私自身が都市計画にどのように関わっていきたいのかがはっきりして、就職先選びにも影響を与えた。



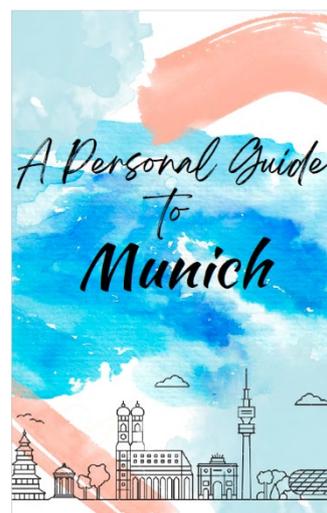
図：展示会では、発表に興味を持ってくださった来場者の方と意見交換をすることができ、よい経験となった（写真掲載は承諾を頂いた）

### セミナー

3つのセミナーを履修したが、教授またはチューターによってセミナーの内容がよく計画されているか、に大きな差があり、よく計画されているものはとてもスムーズに進んだ一方で、セメスターの終わり頃になっても最終課題として何を提出するのか決まっておらず、セメスター休暇に食い込んだセミナーもあった。同じ単位数でも授業に割く労力が同じとは限らないので、第1回目のオリエンテーションにしっかりと出席して、見極めることが重要だった。履修人数制限がある場合もあり、オリエンテーションは席を確保するためにも参加する必要があった。

#### (ウ) 文化交流プログラム

Come To Munich Be At Home という文化交流プログラムに参加した。毎土曜日の午前中にオンラインで他の受講者と会い、ワークショップを通じて各参加者の文化的バックグラウンドに対する相互理解を深めるプログラムだった。最終的にグループで何か作品（ブックレット・動画など）を提出することと、アクティビティへの参加が必須となっていた。コロナ感染者数が増えた 11 月後半~1 月前半にかけて、多くの対面アクティビティがキャンセルになったことは悲しかったが、オンラインでも英語で他参加者とディスカッションできたことや、異なる文化について話を聞いたことは大変面白かった。



図：提出した作品

#### (エ) 休日の過ごし方

ミュンヘンはバイエルン州の州都として人口ドイツ第 3 位の都市である一方で、アルプスへ電車で 1~2 時間で行ける距離にある。観光名所は多くないが、イベント毎に人が集まる街なので、街のそぞろ歩きをして人間観察をするのが楽しい。また、月 1 回ほど日曜日にハイキングに行っていた。夏・冬ともに大層な装備が無くても楽しめるハイキングルートが整っているため、気軽なりフレッシュに本格的な大自然を楽しめる点が素晴らしかった。

### 5. 留学を経た考え方の変化

留学経験は個人により千差万別なものであり、特に「留学を経て何を得たか」は非常に個人的な感想でしかないが、一応ここに私の感想をまとめておきたい。TUM での交換留学を経て得たものは 3 つにまとめることができる。

#### 【TUM での留学を経て得たもの】

- ① TUM の建築学専攻の正規学生と同じ量の履修をして課題に向き合った結果、これまで所属学科や他学科履修で養ってきたスキルがある程度通用することが分かり、「海外大学院で建築系の修士課程にもう一度入り直したい」という漠然とした憧れにも似た気持ちを手放すことができた。
- ② 一方で、TUM では修士課程の中で自らのキャリアを選択し目標に近づいていくことができる環境があると分かり、海外での就職を本気で目指す際に、海外大学院で 1~2 年を過ごすことを選択肢に入れようと考え方が広がった。
- ③ ドイツ人や様々なバックグラウンドの人とのグループワークを通して、英語でのディスカッション力や交渉力が身についた。例えば、どのような場面で自分がリーダーシップを発揮しやすいのかに気づくことができたり、時には相手に否定的なことを強く伝えなければいけない場合もあるが、その後の関係にいい影響を与える伝え方があると学んだりした。

## 6. まとめ

ドイツ留学の1年間はとても濃く、自分自身の考え方も変わった。渡航前の私は、同質的でマニュアル化された日本の教育環境に長年慣れて、どんくりの背比べのように周囲との少しの差に一喜一憂して思い悩んでいた。しかしこの1年で、周囲との違いをあまり気にせずに、自らの行動によって少し未来の自分の毎日を充実させる楽しさを知った。卒業後は日本で就職するが、この得た感覚を忘れずに、さらにアップデートしていきたいと思う。